

大岡昇平著

コルシカ紀行



中公新書

307



中公新書 307

大岡昇平 (おおおか・しょうへい)

1909年(明治42年)、東京に生まれる。

1932年、京都大学文学部文学科卒。仏文専攻。

著書『俘虜記』

『野火』

『武蔵野夫人』

『花影』

『レイテ戦記』

訳書 スタンダール『恋愛論』『バルムの僧院』

『赤と黒』(共訳)

コルシカ紀行

中公新書 307

© 1972年

検印廃止

昭和47年11月15日印刷

昭和47年11月25日発行

著 者 大岡昇平

発行者 山越豊

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 トープロ

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2-1
振替東京34 電話(561)5921代

目次

コルシカ紀行

アジアシオ 3

ポツツオ・デイ・ボルゴの城館 10

ナポレオンの家 23

モンテ・ドロ 36

コルチ 45

ポンテ・ノヴォの戦い 63

バステイアの城塞 72

旧港 84

民族博物館 91

コストーリー嬢 103

カノニカの寺院 121

ボルゴ空港 128

島

参考文献 189

あとがき 191

コルシカ略年譜 193

コ
ル
シ
カ
紀
行

アジアシオ

一九七一年、九月二十五日、土曜日朝七時四十分、パリ発アジアシオ行エア・フランス機に乗るために、オルリイ空港の窓口へ行き、ポストン・バッグを計量器へ乗せたら、窓口嬢が「これくらいの荷物、持てないんですか」といった。

バッグはたしかヴァリーズとして機底に積んで貰うくらい大きくはなく、重くもない。しかし年老いた旅行者である私が、これからコルシカ、イタリア、ウインを廻る二十日間の周遊に、最小限必要の身廻り品でふくれ上っている。ヘルシンキからストックホルム、コペンハーゲン、パリへの旅行も、このバッグ一つで廻って来た。エア・フランスに乗ったこともあるが、託送について文句がついたことがなかった。

多分窓口嬢の気まぐれにすぎなかったのだ、たって主張すれば、機内持込みにしなくてもすんだのだが、どうも私は女の子にさからうのは苦手である。いいさ、大したことはない、

と、思つて、その重いバッグをぶら下げて歩き出したのが、間違ひの始まりだつた。

空港の建物の中を歩くのはたしかに大したことはなかった。機はゲートのすぐ前から出た。しかし一時間二十分後、アジアシオの空港では建物から急に遠いところに飛行機が降り、ターミナルまで一〇〇メートルばかりの固い空港の地面を歩くうちに、左脚に痛みを覚えた。

コルシカの日光は、九月末でも、真夏を思わせるくらい強い。その中を右手にボストン・バッグ、左手にショルダー・バッグとレーンコート（ヨーロッパの天候はいつ変わるかわからないので、これは離せない）をぶら下げて行けばずっしりとした重みが、両脚にかかるのを感じたのである。

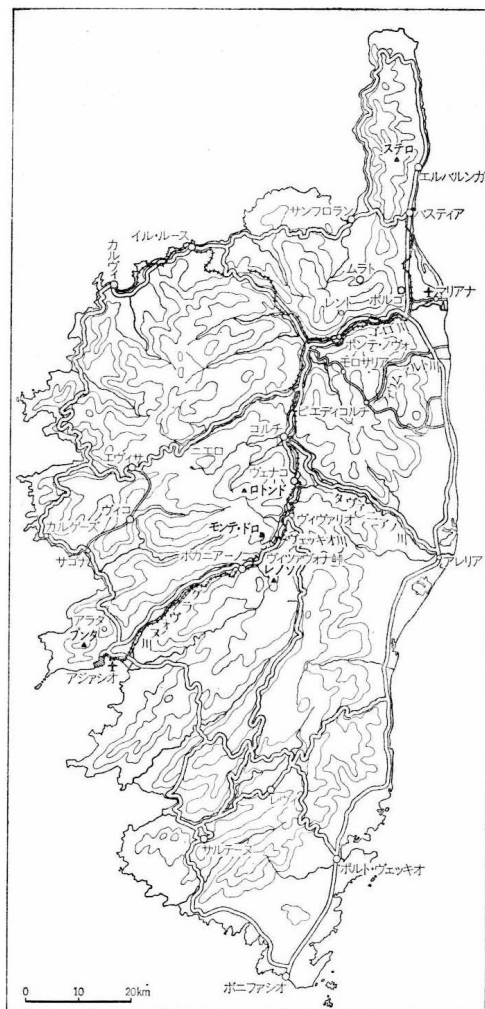
こんどの旅行は不思議と天気には恵まれて、合計四十五日のうち、雨は一日降っただけだつた。そのたった一日の雨の日、ヘルシンキでタクシーをつかまえるために駆け、安全地帯を踏みはずした時から膝が痛み出した。少し腫れ上つて来た。しかしパリで二週間休養するうちに腫れは引き、痛みも遠のいていたのだが、アジアシオ空港で、また痛めてしまったのだつた。

タクシーはベント、右側通行のヨーロッパでは、右側から乗ることになる。つまりまず左

コルシカ紀行

足を車内に入れ、それからかがめた全身の重みをかけながら乗る。その瞬間、左脛の外側に疼痛が走った。

アジャシオの町まで十五分、湾に沿ったいい舗装道路。町の中心部の建物が白く光る。



コルシカ島はシシリア島サルディニア島と、西地中海に南北につながった大島の中で、一番北にある。南フランスより西北イタリアのジェノヴァやピサに近く、住民はイタリア人だが、一七六八年、フランスがジェノヴァ共和国から買収して以来、フランス領になった。

しかしそれまでに、パスカル・パオリの独立運動が効を奏し、殆ど島の全体を解放していた。その時、宗主国ジェノヴァとフランスの間で条約が成立する。その経過が一八九八年のフィリピンをめぐるの、アメリカとスペイン両大国の取引に似通っていることに、私は興味を持った。これについては別に書いたので、繰り返さない（「島」参照）。ロマンチック時代のヨーロッパ人が描いたコルシカの未開の風俗、プロスペル・メリメの小説『マテオ・ファルコーネ』『コロンバ』などが、コルシカ人の名誉心と復讐^{ザフンデッタ}の習慣を有名にした。

しかし以来百年、コルシカのフランス化は進んだ。犯罪件数は減少し、多くのコルシカ人がフランス本土へ移住して、官吏、軍人、労働者になった。一九四〇年ファシスト・イタリアはコルシカ人にイタリア起源を思い出せといい、ドイツ軍と共に進駐したが、住民の多くはフランスへの忠誠を守り、一九四三年十月、ドイツ人を追払って、最も早く解放されたフランス領となった。この時、わずかにコルシカ人の気概を示しただけで、戦後レジアーの増

加と共に、夏、フランス人がより多くの日光と魚釣りを楽しみに来る観光島となった。

人口は一九三六年の三二万二八五四人をピークに減少の一途を辿っている。一九六二年には二七万五四六五人、しかしこれは帳簿上のもので（郷土意識の強いコルシカ人は、フランス本土に移住しても、本籍はコルシカに残しておくからである）居住人口は約一八万人と見積られる。うち農業二八％、土木建築一八％、工業は殆どゼロ、サービス業八％である。

要するに現在のコルシカに、かつてスタンダールによって「危険が常に、いたるところに」あり、そのためナポレオンのような英雄を生んだ、と評価された十八世紀のコルシカの倅は求むべくもないのだ。

それなのにいま衰えた肉体と痛む足を持つ私を、この観光的辺境に駆るものはなんだろう。それが主として十八世紀のコルシカ独立史に対する興味であることは、すでに書いた。アジアシオから東北部の古い首都バスティアまで、島を横断する一五〇キロの山道が行手にある。途中、かつての独立運動の中心、山間の町コルチで一泊の予定である。

コルシカの脊梁山脈の中の町々は、四十年以上にわたる動乱の舞台であった。今日、その痕跡は残っているかどうかは、疑問にしても、その土地を踏みたい、という願いが抑えがた

く、衰えた身に鞭打ってここまで来たのである。

独立運動は善玉の独立運動の志士と悪玉のジェノヴァ総督、フランスの將軍という単純な対立に帰せられそうもなかった。分裂があり、裏切りがあった。それは『マテオ・ファルコーネ』のような小説に影を落し、東京で読んだ短いコルシカ史の記述にも窺われる。なぜヴァンデッタのような血の復讐の習慣が、十九世紀末まで残ったか。その動乱の中から、ナポレオンのような冒険者が生れる余地があったか、という問題があった。

少しばかりの詮索癖とセンチメンタリズムを持った極東の文学者が、簡単にコルシカに來られるのは、航空網の発達の結果である。しかしこれは島の舟運業者と水夫の利益に反するので、エア・フランスも易々と空路を開発したわけではなかった。こういう風に運ばれて來た観光客に、古いコルシカが秘密を明かすかどうか。心細い限りであった。

ペンは快いモーターの音を立てて海沿いの道を走り続ける。アジアシオの建物の群れが近くなる。工場や倉庫の並んだ郊外にさしかかるとすぐ山側に曲った。その脇道の取りつきの舗装された私道を左へ上った。ホテル・カステル・ヴェッキオ（古城）だった。

その名の示すように古い城塞の廃墟に接した小高い敷地。ヤシを植えた正面。鉢植のゴムの樹や草花を配した田舎風のロビー。出発する客の荷物が積まれている。

レセプションの女子事務員に聞くと、私のリザーヴした部屋は、一時間くらいいしなないとあかないという。九時十分すぎだった。

朝食は機上ですませている。昨夜はコンコルド附近のエスパース・カルダンの「不思議の国のアリス」を観、ホテルに帰ったのが十二時、朝五時に起きているので、まず仮眠を取りたいのだが、それはかなえられない。ロビーでビールを飲み、休息。団体らしい十二人ばかりの人数、粗末な衣服、だらしない椅子にかけて大声でしゃべる。南仏の田舎町の、日本でいえば「農協」の感じ。

五〇メートルばかり下の国道を通るトラックの音、ホテルの前の道へ上って来る車がギヤ・チェンジする音が、やかましい。このホテルは東京の日本交通公社で予約したもののだが、「ギード・ブルー」には載っていない。町はずれのやかましい新築のホテルではないか、という予感があったのだが、予感是不幸にして当たってしまった。

道の向う側に、背中を見せている建物は何か工場らしく、モーターの音がしている。フロ

ントで観光地図を貰って来た。ナポレオンの家などのある町の中心部まで、二キロぐらいある。それは大した障害ではないが、この雑音は困る。

音の来ない裏側の部屋に当ることを望むはかばかかったが、それもかなえられなかった。やがて通された部屋は、ツウインを一人で使うもので、冷房もきいているし、テレビもある。七〇フランにしては、悪くない部屋で、海も見える。つまり表向きということ、道の音が入って来る。思い切って、窓をしめ切った。すると冷房器の中で、チッと音がして始動する。悪くない仕掛だ。どうせ一泊の予定なのだから、我慢することにする。

荷物を整理し、バスを取り、ベッドに入って仮眠を取ろうとしたが、少し疲れすぎているらしく、変に眼が冴えて眠れそうもない。ナポレオンの生れた家を早く見たい、という願望しきりなり。今日は一日中、起きてしまうことにした。

フロントに電話し、市内見物のためタクシーを呼んでもらってから、着替えにかかった。見物の予定は、ナポレオンの家と博物館、それからプンタという附近の山上のポッツォ・デ・イ・ボルゴの家である。

ボルゴ家はボナパルト家と共に、十八世紀末のアジャシオの勢力を二分した旧家だが、ナポレオンの代から両家は敵となった。王政復古後生き残ったのはボルゴ家で、一八二〇年その家の息子が暗殺された事件が有名である。その領地アラタはアジャシオの郊外にある。『マテオ・ファルコーネ』の原話の一つが、アラタを舞台にしているのは、この地名が当時パリで知られていたからである。

まずナポレオンの家など市内をひと廻り見物し、それからアラタに行くつもりだったが、観光地図をよく見ると、ホテルの前の道はすなわちアラタへ行く道である。まずボルゴの家を片付けてしまってから、ナポレオンの家へ行こう。そこでタクシーをすてて午後いっぱいかけようと予定を替えたのが、二番目の間違いだった。だんだん書くように私はこの日午後、ナポレオンの家へ行けなかったただけではなく、永久にこの不世出の英雄が生れたという客間を見る機会を失ってしまったのである。

タクシ一の運転手は二十四、五歳、黒髪、黒瞳、四角い顔形、髪が頭蓋にびったり張りついていたようになってゐるのは、コルシカ人の特徴の一つで、ナポレオンと同じ。彼は市内見物の約束だけで来たので、一三キロ離れたボルゴの家まで行くというと、ひどくよろこんだ。感情をすぐ顔へ出すのもコルシカ的といえそうである。

道はホテルの裏手から一つの流れに沿った登りになる。右手の平地に六層建の矩形の建物の並んだ団地があつて、郊外の感じを残しているが、そのうしろはすぐオリヴ樹林になり、右造の農家の点在した田園風景となる。

オリヴの葉は濃緑色だが、葉が細く、裏側が白味を帯びているせいか、その緑はあざやかではない。樹はかなりの間隔を取って植えられている。薄赤色と土との対照で、埃っぽい感じになる。

道はうねりながら上って行く。飛行場へ着いた時、空は晴れ上っていたが、少しの間に霧が増えていた。カーヴの加減で、時々車窓に現われるアジアシオ湾の水は薄鼠色で、湾を抱く岬が霞んで見える。

一つの小さな峠を越えると北方のラヴ湾に向つて開けた谷が見渡せる。東にコルシカの脊